

グローバルマインドを培うカリキュラムの再検討

I. グローバル時代に求められる資質・能力

中央教育審議会答申（2005）の「新しい時代の義務教育を創造する」において、グローバル化に関して次のように述べられている。

「我が国が、変動の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれの分野で存分に活躍することのできる基盤を義務教育を通じて培う必要がある」このことは、社会情勢の変化に応じて、国際社会で活躍できる人間を育成する必要性を謳ったものである。

このようにグローバル時代を生き抜く人間の育成が社会的に要請されている中で経済産業省（2010）は、以下のグローバル人材に必要な資質・能力を挙げている。

- ① 社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）
- ② 外国語でのコミュニケーション
- ③ 異文化理解・活用力

（産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会報告書より）

また、グローバル人材育成推進会議（2012）では、グローバル人材の定義について以下の項目を挙げている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

（グローバル人材育成戦略～グローバル人材育成推進会議・審議まとめより）

以上のような経済産業省とグローバル人材育成推進会議の定義をみると、グローバル時代を生き抜く人間に必要な資質・能力はほぼ共通しており、国をあげてこのような資質・能力を培う方向性であることがわかる。

II. グローバルマインドを培うカリキュラムの実践

これまでに本校では総合的な学習の時間を活用して、上述したグローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを網羅した「グローバルマインドを培うためのカリキュラム」について協議を重ね、昨年度に引き続き実施し、その内容や成果について再検討した。

1 国際交流活動について

本校では、平成 13 年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School、平成 19 年よりカリフォルニア州の Odyssey School、平成 22 年よりインドネシアの MENDOYO 第 4 中学校と国際交流活動を行ってきている。



毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、ホームステイなどを行っている。また、Exploris Middle School が来校する際には Shinonome 国際ミーティング、MENDOYO 第4中学校が来校する際にはフラワーフェスティバルでのパレードを行い、特色ある国際交流を展開してきた。さらに、毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通点や相違点を学んできている。次の表1は、国際交流活動に関する主な年間スケジュールである。

表1 国際交流活動に関する主な年間スケジュール

時 期	内 容	備 考
5月 第1週	<u>MENDOYO SMP4 来校（2日間）</u> *1 ・文化交流活動 ・フラワーフェスティバルパレード合同参加	生徒4名 教師5名 来校
5月 第3週	<u>Odyssey School 来校（3日間）</u> ・通常授業への参加 ・意見交流会 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 来校
8月 第3週 ～ 第4週	<u>Odyssey School 訪問（3日間）</u> ・通常授業への参加 ・ホームステイ体験 ・フィールドワーク*2参加 <u>Exploris Middle School 訪問（1週間）</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 訪問
3月 第3週	<u>Exploris Middle School 来校（1週間）</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・Exploris の教師による授業 ・ホームステイ体験 ・Shinonome 国際ミーティング*3開催	生徒8名 教師2名 来校

*1 本年度インドネシアの MENDOYO 第4中学校の来校は実施されなかった。

*2 「フィールドワーク」は、Odyssey School が取り入れている教育プログラムの一つである。生徒がグループごとに様々なミッションを協働で達成していく内容である。これまでサンフランシスコの町中でのミッションを行っている。

*3 「Shinonome 国際ミーティング」は広島県内の公立中学校も招待し、各校生徒会のメンバーがそれぞれの学校活動の取り組みを紹介する。お互いの紹介を通して自校の良さや他校の良さを感じることができる。

ここで特筆すべきことは、本校の国際交流活動は、学校間の交流やホームステイなどを通じた異文化理解にとどまらず、Shinonome 国際ミーティングのように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、グローバル社会における日本のスタンスを示していくために、日本人としてのアイデンティティーが必要となる。

2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み～

本校では、平成25年度より「東雲中学校（Shinonome）の生徒は、自らの使命（Mission）を自覚し、問題発見したことを現地で探究（Research）し、その過程において見通しをもった行動（Action）をとる修学旅行（Tour）—SMART—」を行ってきている。これは、問題



を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協力してミッションを遂行していく力の育成を図った教育プログラムである。また、このSMARTは、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。

ところで、先進的な教育を展開しているシンガポールの Temasek Junior College では、英語力や学力の育成だけでなく、リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践している。本校においても国際交流活動に加えて、グローバル社会のリーダー育成という視点も合わせて重視している。したがって、プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できるSMARTは、グローバルマインドを培ううえで重要な位置づけとなる。次の表2は、SMARTに関する教育プログラムである。

表2 SMARTに関する教育プログラム

時 期	内 容	
第1学年 前 半	自分の興味・適性について Pre Task Trip (広島市近郊)	
第1学年 後 半	Pre Research Tour に向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び行程の計画	
第2学年 前 半	Pre Research Tour (尾道市, 昨年度は呉市近郊) 研究のまとめ・提案及び交流	
第2学年 後 半	SMARTに向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び予備調査	
第3学年 前 半	SMARTに向けた 研究の再考・行程の計画	
SMART (7月)	Task Trip 京都近郊で行うミッションが朝発表され、それに向けて京都に向かいながら行程を計画し、ミッションを協働して遂行する	
	Research Tour 紀伊半島を中心として各人の研究テーマを遂行できるように、協働して現地調査を行い、探究活動を展開する	
第3学年 後 半	研究のまとめ・提案 研究の報告・交流	



なお、個々人の研究に見通しをもたせ、研究の質をあげさせることを目的として、本年度より全学年の生徒にセルフポートフォリオを活用させて、日々の生活や学校行事の中でどのような成長ができたのか振り返らせるようにした。また、各学年でのプログラムにおいて、タブレットPCを用いた教育活動(現地での写真データの収集やプレゼンテーションの作成等)を積極的に行っている。さらに、本校教員は、例えば、

鈴木敏恵氏のプロジェクト学習やアクティブラーニングなど文献研究やそれらの先進校の研究会に参加して、生徒への支援を充実させるように研鑽してきている。

Ⅲ. グローバルマインドを培うカリキュラムの実践の再検証

1 国際交流活動について

アンケート調査の結果（浜岡ほか，2011）から本校で実施する国際交流活動は，グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

平成 26 年 3 月に実施した Exploris Middle School 来校後に，本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「英語を話せるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒が約 8 割，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒は約 9 割いた。これらのことから，本校の生徒は要素Ⅰである語学力・コミュニケーション力の必要性を強く感じながら学校生活を送り，多くの国際交流の活動を行っている様子がうかがえる。平成 27 年 8 月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒へのインタビュー調査によると，「言語に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになること」の重要性について，8 名全員が「とても重要である」と回答した。このことから，実体験によりコミュニケーションの重要性を痛感している様子がうかがえる。

また，平成 27 年 10 月に本校で実施した「渡米報告会」において，渡米交流に参加した生徒が『アメリカ人と日本人のイメージとその実際の姿の比較』という題でアンケート調査等を通して研究してきた成果を発表した。この研究から，アメリカ人は自分に自信を持ち責任感があること，日本人は周囲を意識しすぎたり，自信がなかったりと消極的な面もみられるが，慎重に物事が判断できる点があることを示唆した。以下に，渡米交流に参加した生徒の感想を示す。



〔A君の感想〕

私はこの渡米で，黙っているだけでは相手に何も伝わらないことを実感しました。逆に，1 つの単語でも相手に伝わったときはうれしかったです。自分の想いは持つだけでなく，伝えることが大切であると改めて感じました。

私は，周りの意見に流されにくくなり，自分の意見が素直に言えるようになりました。

〔Bさんの感想〕

私は渡米交流を通して，積極性を一番学びました。何にでも積極的に挑戦し，取り組むことで，新たな発見や喜びがありました。現地でだけでなく，日本に戻ってきて自分たちが変わったと感じたこともありました。多くの人に積極的に話しかけられるようになったことや失敗を恐れずに何でも挑戦できるようになったと感じました。渡米交流を通じて，楽しむことは何より大切だと思いました。

研究課題の報告やA君とBさんの感想から，渡米の経験が異文化に対する理解に加え，人としてのアイデンティティーを強く意識する機会になったと解釈できる。また，発表の最後に身近な人や物への「感謝」を大切

にすることを主張した。このことは、グローバル化の進む社会の中で円滑にコミュニケーションを進める手段の1つであると考えられる。

2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み～

今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「総合的な学習の時間の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対する結果は、次の表3のようになっている。

表3 「総合的な学習の時間の内容は社会で役立つか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2 (どちらかといえば、 当てはまる)	3 (どちらかといえば、 当てはまらない)	4 (当てはまらない)
本 校	39.7 (34.6)	43.6 (44.9)	10.3 (14.1)	6.4 (6.4)
全 国	26.0 (23.1)	48.5 (48.1)	18.7 (20.7)	6.7 (7.9)

※ 表の数値は百分率(%)であり、()内の数値は昨年度の結果である。

また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対する結果は、次の表4のようになっている。

表4 「総合的な学習の時間ではPDCAサイクルで活動しているか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2 (どちらかといえば、 当てはまる)	3 (どちらかといえば、 当てはまらない)	4 (当てはまらない)
本 校	59.0 (47.4)	29.5 (38.5)	10.3 (11.5)	1.3 (2.6)
全 国	18.2 (16.2)	39.7 (38.5)	30.1 (31.4)	11.8 (13.7)

※ 表の数値は百分率(%)であり、()内の数値は昨年度の結果である。



以上の生徒質問紙の調査結果から、平成25年度から本校で実施しているSMARTの活動は、3年目となる今年度さらに充実度を増しながら、普段の生活や社会に出たときに役に立つという視点において、グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

さらに、今年度のSMARTの活動後に、本校第3学年の生徒は国語の授業の中で「後輩へ贈る修学旅行のTaskを作ろう」という学習活動に取り組んだ。生徒は、①安全(中学生にとって安全な活動であるか)、②時間(余裕をもった活動になっているか)、③学習の意義・楽しさ、④予算(設定金額内に収まっているか)および⑤その他の5つの観点から自分たちで考えた修学旅行のTask案を吟味する過程で、自らの経験や興味・関心を織り交ぜながら意見を出し合い、分析することができていた。また、分析をもとにより良いTask案を目指すために、教員からアドバイスされた「学習の意義・楽しさ」とい

う観点を重視した吟味ができていた。さらに、各グループで作成したベストプランについて、何にこだわった Task 案なのか明確にして、わかりやすく伝えられていた。

これらのことから、本校の生徒は SMART の活動やそれに関する各教科の授業を通して、要素Ⅱであるチャレンジ精神や柔軟性にかかわる自信を高めていった様子が見える。

IV. おわりに

グローバルマインドを培うために本校では、グローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてを網羅したカリキュラムを実践し再検討した。このカリキュラムは、要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力や要素Ⅲ：異文化に対する理解の伸長を目指す「国際交流活動」と要素Ⅱ：チャレンジ精神や柔軟性の伸長を目指す「SMART」の2つの方向による実践であることが再実証された。

第一に、本校の国際交流活動は、生徒へのアンケート調査やインタビュー調査から、渡米した生徒の語学力に加えて、全校生徒におけるコミュニケーションへの意識において有用な実践であることを再確認した。

第二に、本校における SMART の活動は、全国学力・学習状況調査からこの3年間で表3における「当てはまる」の回答率は約10%上昇しており、また、全国平均の150%の割合（表3における「当てはまる」の回答比は1.52である）で、社会に出たときに有用な実践であることを裏付ける結果となっている。

今後は、今年度有効性を示した総合的な学習の時間を活用した「グローバルマインドを培うカリキュラム」の枠組みをもとに、さらなる内容の充実をめざした実践を展開していきたい。具体的には、プロジェクト学習システムや ICT の有効活用というような視点をさらに発展させていきたいと構想している。また、今回紹介した国語科のように、総合的な学習の時間とリンクさせた学習活動を各教科に取り入れることで、総合的な学習の意義やその有用性をさらに高めていきたい。さらに、各教科等で日々行う授業と連携する視点から、すべての教育活動において子どもたちのグローバルマインドの伸長に寄与できるような実践を構想していきたい。これからもグローバルな視点で考えて積極的に挑戦し活躍できる人間を培うためのカリキュラムを継続して、発展させていきたい。



引用・参考文献

- グローバル人材育成推進会議：グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ），2012.
- 浜岡恵子ほか：中学校における国際交流の在り方－Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4との交流を通して－，広島大学学部附属協働研究紀要第40号，59-64，2011.
- 広島大学附属東雲中学校：社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ－大学と連携した研究開発システムの構築に向けて－，平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書，33-38，2014.
- 文部科学省：中学校学習指導要領，2008.
- 産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会：報告書～産学官でグローバル人材の育成を～，2010.
- 中央教育審議会答申：新しい時代の義務教育を創造する，2005.
- 広島大学附属東雲小学校・中学校：平成27年度東雲教育研究会実施要項，国語科，2015.